

句集

花合歡

石塚  
有香



## 序

能勢グループの石塚有香さんとの出会いは古く二〇〇三年に遡る。時の経過とともにメンバーは少しずつ変わってきたように思うが、彼女はいわば古参としてずっと変わらずに私の活動を応援してくださった。

有香さんはよく忘れ物をされる。そんなに深刻なことではなく、たいていは「ここにあるじゃあないの…」という笑話のような落ちで終わるのである。でも、いいかえればそれだけ些事にこだわらない大らかな性格なのである。

月涼し家出の猫の帰りきし

仰向けに猫の寝てゐる残暑かな

ペットも又飼い主に似るのかと思わず笑ってしまふ。

少し俳句がわかってくるといたずらにひねくりまわしてかえって訳のわからない句づくりになりがちであるが、彼女には野心というものが全く無いので見て感じたままを素直に詠んで佳句が授かるのである。

追ひついて 相合傘や合歡の花

燕来る 維新息づく 古町に

スキップの子が見え隠れ 白日傘

いづれも季語の説明はまったくしていかないが、その取り合わせは絶妙で代表作といえる。パソコンとかも余り得意でない彼女がウェブサイト『ゴスペル俳句』のインター

ネット句会に参加するために陰でご主人が応援しておられるという。

間引き菜を夫がさし出す勝手口

仲の良いご夫妻の日常が見えてくるようので微笑ましい。つづいてよき俳句ライフを楽しまれるようにと祈って序のことばとしたい。

平成三〇年六月吉日

やまだみのる



每日句会入選句

体験の子が持ち帰る今年米

山からの風に顔上ぐ草刈女

青空を貫かんとす秋燕



万緑のまつ只中に妻籠宿

師の句碑を訪ね寺苑の秋を聞く

日盛りの揚羽入りくる深庇

山辺より駈け降りてくる稲穂波

白南風に嬰の干し物泳ぐ竿

東天に赤き火星や涼み台

一 声 の 後 の 沈 黙 牛 蛙

子 ら の 声 広 場 に 溢 れ つ ば め く る

山 笑 ふ 大 吊 橋 の 揺 れ に 揺 れ

踏青や百円野菜あれば買ひ

大とんど四隅の樽に鎮め水

藍残る薄暮の空や春きざす

風花やひしめきあへる船溜り

緋毛氈床几にぎあふ菊花展

路地裏の隅々照らす十三夜

日向ぼこ百面相の吾子飽きず

隠し持つ孫敬老のプレゼント

秋の雲ヒマラヤ杉を過りけり

啄木鳥や刻印著き力石

月涼し家出の猫の帰りきし

バス停の人も黙禱終戦日

川遊び弁当箱にメダカの子

出漁の水脈キラキラと夏兆す

尺取の歩み眠気を誘ひけり



囀りの天降るがごとき一樹あり

靴跡の大小や青き踏む

息白く揃ひ集団登校す

老木の寒肥は根より離しやる

夕日影線描画めく冬木立

元氣よく吾子等の御慶玄関に

凍空を睨みし鋭目や義士の像

掘り上げし芋に万歳する園児

吾子をかし紫苑に寄りて背くらべ

稔り田をかけ巡りをる里の風

石仏尾花の丈に埋もれけり

有り無しの風に大袈裟竹の春

待宵や下駄音ひびく石畳

万燈会光りの帯といひつべし

新涼に聞き耳立てて猫眠る

月涼し先ゆく吾の影もまた

青田中村の亭午は無音界

暮るるまで少し間のあり合歡の花

時鳥ないて家路を急かせけり

一両車広き植田を走ること

藤房に遊ぶ風あり峡夕べ

小繕ひして雛調度納めけり

雷神といへど童顔草萌ゆる

囀りや片言ふえし子とあそぶ



啓蟄の土蹴散らして逆上がり

竹筒に勢揃ひせし豆雛

磊々に奏でそめたる春の水

遮断機の音の訝す峡余寒

万歩計見せ合ひもして青き踏む

逃げ出して戻らぬ猫や日脚伸ぶ

山粧ふ埴輪の巫女は目を細め

白き息はずませママを呼びに來し

黄落の旧居留地をたもとほる

七五三パパは専属カメラマン

庭の柚子ほめれば一つお土産に

爪立てて柚子の香をうべなひぬ

藪の中落葉に沈む一羅漢

瞬くは谷戸の底ひの冬灯

野良猫の声のか細く秋風裡

身に入むや橋詰め立つ水難碑

口開けし通草をさげて句座の友

父母の遺影も並べ月愛でる

台風一過中天の月円かなり

海風ぎて秋日に金紙揉むごとし

雷火一閃待望の雨来たりけり

実り田の畦に傾く石仏

望の月蕨の波を濡らしけり

写経会の耳に間遠の牛蛙



家中を走つて閉める夕立急

蝉時雨浴びゆく峡の奈落径

先客の猫に隣りて夕端居

ダムに添ふ迂回路合歡の花盛り

緑陰をトラツクが占む亭午かな

逆上がりできますやうに星の竹

全開の本堂涼し忌を修す

数珠なして畦ゆく子らや青田風

高欄を吹きぬけてゆく青葉風

植え終へし棚田に峡の風生る

堂縁を覗けばここだ蟻地獄

竹筒に百円落とし春菜買ふ

老い母の苞にと畦の土筆摘む

語り継ぐ民話の里や花馬酔木

菜箸の焦げるもよしと目刺し焼く

どこことなく母似と思ふ雛の顔

蒼天に鳶放ちたる雪野原

啓蟄の畑に林立もぐら除け

帰宅せし吾子後ろ手に愛のチヨコ

寒天干す雫の刻む音幽か

炭小屋の主に匂帳覗かるる

一願をこめて地蔵に寒の水

鎖されたるケーブルのりば山眠る

寒林を縫ひつつ消ゆる郵便車



七草に満たねど至福二人粥

炭焼きの匂ひに満ちて里暮るる

年用意縫ふよりほどく針仕事

読み聞かせるたる子眠る聖夜かな

裸木の天へ振り上ぐ力瘤

修験者の列なす背なに時雨けり

腹巻きの子安地蔵や堂ぬくし

大空の虚ろに一花返り花

美術展出て黄落の径帰る

木の实降る手作りパン屋繁盛す

横すべりするはメタボの木の实独楽

すれ違ふ猫知らぬ顔十三夜

秋澄むや真珠筏の海なぎて

幾筋も立つ田じまひの煙かな

峡の日のいま届きたる薄紅葉

吟行の余禄夕餉の栗の飯

蔓しごきたる手に零余子三つ四つ

爽やかや寝返り出来し児の笑顔

道曲がるたび楽変はる虫の闇

羊群の寝そべる牧の風は秋

よく成りてゴーヤカーテン窓涼し

日盛りや遅れ癖なる鳩時計

キャンプより遅しき笑み持ち帰る

子の数と同じ世話役神輿行く



厄除けの鈴振りかざし巫女涼し

初蝉の一声空耳かと思ふ

夕暮れの谷間に合歡の花明かり

母の忌や遺愛の合歡の花開く

糸結び覚え七夕笹飾る

昏れ残る彩は水際の花菖蒲

海沿ひに続く鉄路や月見草

追ひついて相合傘や合歡の花

花苗のあまりを貰ふ梅雨晴間

かな文字を描くごとくに恋螢

星空にまぎれて消えし螢かな

女生徒の弾ける笑ひ更衣

堂涼し豊かに笑まふ伎芸天

故郷の匂ひの新茶とどきけり

燕来る維新息づく古町に

瀬の樂に和して遠音の河鹿笛

若葉道抜けて港の見える丘

泳ぐごとと揺るる水面の幟影

ボール蹴る子等に広場の花吹雪

田一枚紫雲英浄土や峽の里

こうのとり飛来す里に風光る

春耕の土塊付けて夫帰る

電線に遠見の鳥春田打つ

小流れにラインダンスや踊り子草



牧羊の群れて春泥まみれなる

ぼんぼりを灯して雛を納めけり

青き踏む車椅子より降り立ちて

手作りのお手玉もまた雛調度

早春の風が頬刺すダム湖畔

春炬燵走り書きなる置き手紙

早春の翠黛しるき遠嶺かな

畑のもの洗ふ水桶厚氷

車椅子押すも押さるも着ぶくれて

小流れの奏でる汀下萌ゆる

こし方の佳きも悪しきも札納む

縫初の針軽やかに布走る

炭をつぐ僧侶なかなか俳句通

ケンケンの丸の大小路地の春

父と子の手を往き来せり風の糸

と見る間に山白変す吹雪かな

異国より届くメールの賀状かな

引き戸より猫の手が出て隙間風

病み抜けし人をかこみて納め句座

見え初めし嬰に灯点す聖樹かな

スケツチも添へし句帳や紅葉狩

羅漢どちみなお揃ひの毛糸帽

村時雨観音堂に宿りもす

夕日射す軒に連なる柿すだれ



小鳥来てゐるらし猫の鈴がなる

スキップの出来る子出来ぬ子秋高し

団栗が溢るる吾子の宝箱

運針の指一と休みちちろ鳴く

白壁の土蔵に沿ひて秋桜

句碑に降る木の実ならばと拾ひもす

ちとお茶のつもりが秋の暮早し

鼻欠けし地蔵の顔に里時雨

間引き菜を夫がさし出す勝手口

俯瞰する峡の集落秋澄める

縫ひ物の手もはかどるや夜の秋

仰向けに猫の寝てゐる残暑かな

鬼灯を鳴らす小さき歯を立てて

ケアハウス大夕焼に包まるる

出迎へは青田風なり無人駅

節水と貼り紙のあり墓洗ふ

かなかなや水音絶へぬ神の森

ひまはりの燃えて漁港の昼静か

母の忌を修す夏書の墨匂ふ

夏霧の山壁撫でて流れけり

あちこちにたつ泥神楽蛸蚪群るる

夜濯や思ひで多き旅衣

線描の彫りの涼しき磨崖仏

白南風や漁港に隣る一末社



わが視線わかりて毛虫動かざる

梅雨空に燃え続けをる平和の灯



定例句会入選句

閻王のまつげにあらず春の塵

御仏の正面に座し春愁ふ

初髪の娘ら匂ひける朝かな

予定表パスはやむ無し風邪に伏す

裸木のグーチョキパーと仁王立つ

裏白の風にダンスをするごとく

草紅葉石仏多き能勢の里

法話聴きつつ句作しぬ彼岸寺

一陣の滝風木々を揺らしけり

登山道譲りあひては相会釈

山の影映して青田昏れなんと

一斉に駆け出す風の竹落葉

天降るごと浴びる新緑鳥語また

手をつなぐ試歩の二人に花万朶

自づから序列をなして鴨進む



初雪がどか雪となり屋根悲鳴

かがみこみ句碑よむ肩に萩こぼる

セブ島の海を再現館涼し

打楽器のごとトタン屋根打つ夕立

嶮磴に仰ぐ青葉の甲山

兵士らの墓碑の辺に草芳しき

寺隅にもてなしのごと福火焚く

風花の横走りせる車窓かな

うろこ雲貫かんとす摩天楼

太公望女も紛る池小春

牛蛙一と声句座の和みけり

瀬の風に定家葛の匂ひけり

尺取の一人をどりす枝の先

お御足にすぎる老婆や涅槃変

一病の機嫌とりつつ落葉搔く

飛び交ひて鶉騒がしき甌岩

小春日や岩のパワーを掌に

由緒板読む間も落葉降りやまず

道草の物入れとなる麦わら帽

親つばめ分け隔てなく餌を与ふ

黴の書をさらして父を偲びけり

山の駅夜目にも白き栗の花

食ひ初めの膳に初生りいちごかな

子雀の出入り自由やあひる小屋



元氣よく「ハイ」と答へて卒園す

春一番スカートト押へ髪押へ

ガイドする手話の指先風光る

手作りの雛それぞれに個性あり

ウエディングドレス聖樹のウインドに

今年米湯立の釜へ投げ入れる

さはやかや植木鋏のリズムまた

下校子のカバンが並ぶ葛の土手

戻り梅雨組みし足場もそのままに

駅員の手すさびならめ豆の花

鯉はねし波紋に揺らぐ落花かな

達筆と見えし吉書も灰となる

寒禽の声良くひびく神の森

甲山招き寄せある尾花かな

柿紅葉同じ模様はなかりけり

朝涼やテーブルクロスは伊勢木綿

葉づたひに光移らふ初螢

スキップの子が見え隠れ白日傘

バラの園伏し目に祈るアンネ像

花虻を屈伸運動して避ける

丘を占む風力発電風光る

百度踏む媼に宮の梅固し

初笑ひ百面相の嬰の顔

和太鼓の一打が合図吉書揚げ



ゆりかもめ群舞して橋越えゆけり

蔵人の草履に格差身にぞ入む

井守の尾消えて溝そば揺れ残る

異なる樂は外来種かも虫すだく

一末寺村総出なる施餓鬼かな

宿題の子らが占めたる夏座敷

流星を語る子の瞳に星宿る

星流れ一村包む深き闇

奥の院まで足延ばし春惜しむ

草萌ゆる大地を蹴つて太極拳

遠足の子とおしやべりす吟行子

汲み上ぐる釣瓶に春の水あふれ

鳶の輪の下にひねもす耕せり

肩車風船空に泳がせて

山荘の銀座通りを避暑散歩

風涼し水郷巡る櫂の音

夜を濯ぐ腕白坊主寝つかせて

風化して読めぬ碑蛇の衣

火ばさみに捕へし百足逃げにけり

でで虫に名前を付けて子ら遊ぶ

竹の秋 獣害かこつ 老農夫





吟行句会入選句

堰落つる水音も里の秋の声

相寄りておしやべりしては花野ゆく

延べし手の上へ落ちたる椿かな

招靈や源氏ゆかりの地に繁る

結界の解かれし寺庭すみれ咲く

相聞のごと向きあふて落椿

四つ目垣お気に入りらし赤とんぼ

小鳥来る千手を翳す大樟に

丁寧糸菊ほぐす主かな

一陣の風にひれふす若楓

譲りあふ歩板の狭し花菖蒲

婦人部の店繁盛す村祭

玄室に響くガイドの声涼し

揚羽蝶寺領を案内するごとし

セコイヤの鉾をのむぞと雲の峰

尖塔に銀の十字架木の芽雨

と見こう見屋根に物見や梅雨鴉

雨粒を珠とちりばめ若楓

弁天の胸に色射す紅葉影

手に当たる喜雨の一滴すぐに消ゆ

堰音の絶えず螢の闇深し



まなかひに陵見ゆる丘涼し

遅刻して気が急くばかり道薄暑

下閤を水馳せてゆく水路閣

遠望の五山うつすら夏霞

山門をくぐりて仰ぐ懸り藤

観音のさしのべし手に若葉雨

風光る船銀座なる須磨明石

寒々と廃屋残る行者道

寒林の中も郵便配達区

祇王寺の扉にたまる散紅葉

温室にハロウィン人形飾らるる

足湯して秋思うべなふ心旅

磊々を好みて遊ぶ川とんぼ

投句所もありて賑ふ花の道

列なして並ぶ屋台や花堤

彩窓の天使春日に舞ひにけり

堂縁に憩へと揺らぐ若楓

山法師真下の句碑を濡らさざる

宿庭の螢火われを歓迎す

深閑と千年杉の宮涼し

蟻地獄小さき御堂を守るごと

万緑の底ひを進むバスの旅

亀甲の石垣涼し離宮道

奥見えぬ間歩の入口落椿



水子仏並ぶ頭上に雪帽子

公園に独りぼつちや雪だるま

後足宙にもがきて鴨潜る

天鷲絨のごと木蓮の太芽かな

火吹竹肺全開に吹きにけり

あめんぼう群れて夕日を散らしけり

案山子とも人ともつかず夜の明くる

明日香路連なり進む秋日傘

目まとひを払ひ会釈を交す野路

曼珠沙華供花に挿されし石舞台

加茂川の中州を渡る花菜風

温室の狭しと占むる奇樹珍樹



## あしがき

能勢の句友の皆さんの応援を得てすばらしい句集が出来上がりました。素敵な宝物をプレゼントされたようで、大変ありがたいことだと喜んでおります。

私が俳句をはじめましたのは、子供の小学校の同級生のお母さんに誘われて地元の同好会に入れて頂いたのがきっかけでした。その後、不思議なご縁でウェブサイトを『ゴスペル俳句』の会員に加えて頂き、親しい句仲間と一緒に毎月の吟行句会を楽しむ日々となりました。

入学す汀女の母校とは知らず

熊本にいた初孫の入学式で授かった句で、汀女の母校であったことを知って驚きま

した。その孫も今年で十五歳、孫たちの成長とともに私の俳句ライフがあったように  
思います。何事も長続きしない私でしたが、能勢の句友の皆様とのお交わりが楽しく  
て今日まで続けることができました。これからも子供や孫たちから若いエネルギーを  
注入してもらいながらよき俳句ライフを続けていきたいと願っております。

最後になりましたが、身に余る序文を賜り何かとご尽力いただいた、やまだみのる  
さんと能勢の句友の皆さんのご助言に心よりお礼申し上げます。

平成三〇年六月吉日

石塚 有香





『花合歡』 石塚有香句集

平成三〇年七月一五日 印刷

平成三〇年七月一五日 発行